

メールレター(24)

老いの暮らし

静かに降っていた雪がはたと止み、訪れた夕暮れの間には白く化粧をした街景色が浮かび上がっています。週末の古都は、行き交う人もなく、まるで眠っているかのようです。音が雪に吸い込まれ、退屈なほど静か。。。です。

久しぶりに会った友に思いを馳せています。カナダに暮らして50年になる日本人の友人は、誰にでもやってくる老いを賢く暮らしています。転んでは脚を折り、また転んでは手を折り、1人暮らしの不安と不便を感じ始めた82歳に、有料老人ホームにはいりました。なかなか綺麗な所で、プール、ジム、ミーティングルームを備え、アクティビティも盛り沢山です。おっとと、カフェテリアと言われているレストランもついています。ここで2人でランチをしてきました。激しい吹雪の中を道に迷い、ほぼ凍死しそうな絶望状態でたどりついたのですが、玄関にポツンと座って長いこと待っていてくれました。

「貴方の訪問を美味しいご馳走のように楽しみしていたのよ。」

老人ホームというより小綺麗なマンションでしょうか。看護婦さんのいる医務室もあり、救急には備えていますし、簡単な看護はしてくれるようです。

この老人ホームは、60%が英語系で40%がフランス語系です。看護婦を含め従業員は、全員バイリンガルです。皆、穏やかで笑顔を絶やしません。

「貴方、英語をずーっと話し続けられるの？ほら、頭がズキズキするとか、腹がシクシク痛むとか、英語にもフランス語にもならないんじゃないの。」

出産のパニック状態で一切フランス語がわからなくなったことのあるマダム田中は、老境のバイリンガリズムには大きな疑問をいただくのです。頭脳から重ね塗りのメッキが、はげていってしまうのではないのかと。。。

「わからないところはゼスチャーかなあ。ボケたら日本語に戻るかも。私の亭主は、死ぬ間際は母国語のフランス語だけだったものね。」

「それだよ、ここで暮らしていく問題は」

親と同居するという習慣がないこちらでは、不自由さを感じ始めたら、こうした老人ホームに入る人も少なくありません。

「理想的ね。環境も住んでいる人もきちんとしていて快適だし。」

「まあね。人生最後の部分、あまり惨めでない一人暮らしをしたいと思ってね。猫ちゃんここに入ることにしたのよ。何が良いかって、部屋に洗濯機乾燥機付いているから楽よ。洗濯のし放題。(こちらではベランダに干すということはできません)」

「お部屋も大きいし、リビング、ダイニング、キッチンもゆったりだわねえ。パーティーもできそうだし、お客の1人くらいは泊まれそうね。」

「できる、できる」

「病気の時は診てくれるの？」

「たてまえはね。でも注射をすれば幾ら、包帯を替えて貰えば幾らって、ちゃんと請求されるから、決して介護付きとはいえないのよね。ちょっと修理があれば、イケメンの従業員に特別にしてもらえれるけど、それも袖の下。」

老人ホームに入っても、安楽にぼーっとはしてはいられないようです。

「それにしても、ここのカフェテリア、かなり美味しいし、ウエイトレスも愛想が良いのね。」
周りをみれば、家族ずれで一緒にランチという人も少なくありません。日曜日毎にこうして老いた親の様子を見ながら会いにくるのでしょう。

「だって貴方、このカフェテリアは老人ホームとは別の営業ですもの。愛想は良いわよ。レストランと同じよ。」

「病気の時は取り寄せられるんじゃない。」

「取り寄せ代は、別口料金よ。」

どうやら老いの暮らしは、お金がかかりそうです。高齢の一人暮らしが多いこの街では、老いの暮らしは深刻な問題になってきました。辛口で頭の切れる友人は、まだ人の助けは必要としないのですが、用心のため、この暮らしを選んだようです。部屋を出る時は服装を整える、それだけでも老化の防止になるようですし、誰かと挨拶をするだけで孤独は避けられるようです。それにしても若いイケメンが全くいないのは返す返すも残念です。

脳腫瘍がある1人暮らしのこちらのもう1人の友人は、記憶が定かでなくなり家もゴミ屋敷になりはじめたころ、家族が慌てて老人ホームに入れました。ここは介護が中心です。2度頭の手術をしなければいけないようですし、その後も闘病が続くと言われ、一切の治療を拒否し、このまま人生を終わる生き方を選らんだようです。元看護婦のこの友人には、病気が何を意味するのか良くわかっているのではないのでしょうか。誇り高い人ですから、やがて消えていく命の終わり方を自分なりに決めていたのでしょうか。

「年だわねえ。足腰がだんだん弱くなったし、記憶もね。」

「たまには散歩とかで外出くらい出来ると良いけど。」

「1人では一切ここからでられないのよね。写真の整理をしては昔の日々を思っているくらいかなあ。」

深い雪に閉ざされた、花も緑も見えない世界で暮らす先の見えない日々。口先は相変わらず辛く、明るく楽しい会話も何も変わらず、病人の弱みは一切みせないのです。

「貴方、その写真を見ながら、追憶ノートを書いてみる気はない？少しでも書けたら私に送って。貴方の思い出、他の友達と一緒にシェアするから。」

ハッと息を飲むように会話が途絶え、

「それ良いかも。何だか楽しくなってきたわ。」

世界中を旅して回った冒険家の看護婦だった友人の思い出箱は大きいのではないのでしょうか。机に向かってもう書き出しているかもしれませんし、もしかしたら一生届かないかもしれません。

こんな電話を切ったマダム田中に届いたもう1人のフランス人の友人のメール。

「和子、母が亡くなって、今フランスに帰っているの。何時そっちに戻るかわからないわ。」友人の母親は94-95歳の高齢で妹さんと一緒に、介護付き老人ホームに入っていました。ロワール川に沿ったソローニュ地域の小さな村にある古城を改良した介護つき老人ホームです。村民なら誰でも入れるようです。食事は、シェフが作り、ワインがつき、チーズ、デザート、コーヒーもつくフルコース。しかもお城の中。さすがフランスです。この辺に国の基本的な豊かさを感じます。

それぞれの老いの暮らしでしょうか。ドリトル先生ですか？ドリトル先生は、老いの暮らしには遥かに遠く、ダラスで剣道セミナーに参加し若者に刺激され若返っているようです。